

"来! BuRaRi"はライブラリの意味ですが、ぶらりと来てもらえる図書館に!との思いも込めています! "にほんばし"の題字は、寄席文字書家の橘右女次(たちばなうめじ)さんによるものです。

日本橋図書館 館報

2024.10.31 (No.104)

(題字/橘右女次)

発行 中央区立日本橋図書館 中央区日本橋人形町 1-1-17 (3669) 6207

特集

日本最大級の繊維問屋街業

~日本橋横山町・馬喰町の歴史~



横山町・馬喰町~平成・令和そして未来



昭和55年(1980)頃<mark>の横山町繊維問屋街</mark> 写真提供:中央区立京橋図書館

馬喰横山駅に降り立つと、多くの衣料品店が並んでいるのが目に留まります。そこは江戸時代から現在も続いている日本最大級の問屋街『横山町・馬喰町問屋街』です。

現在の問屋街はアジアからのバイヤーが増加し、またコロナ禍で開催が中止されていた祭りやイベントの復活により、和装小物や雑貨などを扱う企業は忙しくなっています。しかし、2003年の調査では、約4割の経営者が自分の代で廃業を考えているなど、問屋街存続が危ぶまれている時期もありました。建物の老朽化が進む中、横山町・馬喰町は空港や東京駅へのアクセスが良いため、ホテル・マンションへの再開発が進んでいるのも事実です。

そんな中、江戸時代から続く問屋街を存続させるため、中央区などと協力をして街の活性化を図りました。古い建物のリノベーションを進めながら、さまざまな店舗やクリエイター、事業者を誘致し、新たなビジネスを生む街を目指しています。

また、問屋街のことを多くの人に知ってほしいという思いから始まった「大江戸問屋祭り」もあります。年に2回7月と12月の第一日曜日に、横山町馬喰町新道通りで開催され、卸専門商品を一般客も問屋価格で購入することができます。次回は2024年12月1日の予定で、記念すべき40回目の開催になります。



令和6年(2024)の横山町繊維問屋街 撮影:中央区立日本橋図書館

次ページでは横山町・馬喰町問屋街の歴史を辿ります。

江戸時代

江戸幕府開府前、現在の横山町・馬喰町は寺町でした。明暦 3 年(1657)の大火後、町屋が広がり、小間物問屋や薬種問屋が集まるようになりました。呉服店が多い堀留町に近かったことから、小間物問屋では髪結い用品、化粧品、半襟、帯留めなど多岐にわたる商品を扱っていました。

江戸時代後期、横山町・馬喰町は当時のメインストリートに面しており、横山町は江戸有数の繁華街として非常に賑わっていました。横山町の小間物問屋を訪れる人たちには、宿泊が必要なことも多かったため、宿屋街の馬喰町も一層発展しました。

明治~第二次世界大戦下

明治期に入ると市電が本石町通りを走り、宿屋街だった 馬喰町にも小間物屋が更に増えました。服装の洋装化に伴い扱う商品も増え、メリヤス、洋服地、時計、文具などを輸入する業者が栄えました。この当時急激に伸びていったのはビニール製品で、レインコート、バッグ、テーブル掛けなどが問屋の店頭に多く並ぶようになりました。

また、唐物店と呼ばれていた時代は、一つの店舗で洋傘、時計、ランプにビールまで取り扱っていましたが、現在では店舗によりメリヤス、ハンカチーフ、タオルなどそれぞれ主力商品として専門店化しています。



昭和32年(1957)頃の馬喰町繊維問屋街 写真提供:中央区立京橋図書館

昭和初期の経済恐慌によりデフレが進む中、有力問屋が集まり、昭和8年(1933)に「横山町大通り聯合奉仕会」が結成され、商品購入時に観劇や温泉への招待や景品との交換ができる優待券を配布していました。

第二次世界大戦下ではメリヤス製品、布製品は国の配給制となり、問屋機能が失われてしまい聯合奉仕会は解散となります。

第二次世界大戦後~



昭和38年(1963)馬喰町問屋街写真提供:中央区立京橋図書館

大戦後、焼失した問屋街に再び人を集めようと、問屋経営者とその従業員へ呼びかけ、疎開先へ案内状を送付し、新聞に『一日も早く横山町へ帰って下さい。』と掲載して人々を呼び戻しました。売れるものは何でも売る「よろずや」状態で、経済警察(戦中・戦後の経済統制確保のための組織)の目も厳しい中、商売をしていくこととなります。

昭和23年(1948)に横山町馬喰町問屋連盟(後の協同組合東京問屋連盟)が発足。昭和25年(1950)に横山町大通り奉仕会も横山町奉仕会と名を変えて復活し、問屋街を盛り上げていくこととなります。問屋街では特別大売り出しの日を設定し、優待券の配布サービスも再開しました。戦前からアジア諸外国に出していたカタログ発行や広告も復活させ、海外視察団の受け入れ、社員育成のため海外研修旅行、ビジネススクールの開設や経営セミナーなども随時行いました。

このような先人たちのたゆまぬ努力があってこそ、現在もなお日本最大 級の問屋街を存続できているのです。 さんかつ

●三勝ゆかた博物館

管理者:三勝 株式会社





※完全予約制です※

※ご予約は下記メールアドレスまたはインスタグラムからお申し込みください

※最新情報は公式インスタグラムをご参照ください

メール: contact@sankatsu-zome.com

インスタグラム:https://www.instagram.com/sankatsu_yukata/

所在地:中央区日本橋人形町3-4-7

電 話:03-3662-3860(平日11:00~16:00)

開館日: (完全予約制) 月・火・木~土

開館時間: 14:00 ~ 16:00

(1時間入替制/1週間前までに要予約)

休館日:水・日・祝日・年末年始 ほか不定休あり

アクセス: 人形町駅A5番出口 徒歩2分

染職人の技

人間国宝・清水幸 太郎の精巧無比な 作品のほか、過去 に使用された伊勢 型紙、染色の道具 類、染色前の反物 や新作も陳列され ています。

※博物館は2フロアに分かれていま す。1階と地階で開館頻度等が異 なります。

◇1階:月・火・木〜土/型染もめん と伊勢型紙のギャラリー

◇地階:月曜のみ/博物館観覧料 2,000円(博物館限定手拭とご説

明付)

たげん

②イチマス田源・呉服

管理者:株式会社 田源



着物と和マス田派ます。 蚊 乗した田 (1871)。 呉服問 商売道

います。

所在地:中央区日本橋堀留町2-3-8

電 話:03-3661-9351

開館日:年末年始等を除く毎日(不定休あり)

開館時間: 10:00 ~ 17:30

アクセス: 小伝馬町駅1番出口 徒歩3分

人形町駅A4番出口 徒歩5分

೬၆

4染物展示館・虎の檻

管理者:有限会社 高虎商店



江戸の粋

「虎の檻(おり)」という 展示館名は、2代目 の店主が外から覗か れた際に「まるで檻の 中の虎だ」と言ったこ とが由来。 和装小物を扱う工房「濱甼髙虎(はまちょうたかとら)」の店内のショーケース内に、染元の仕事で使用する様々な段階の道具や型紙など、染物に関する貴重な資料が展示されています。

高虎の前身は「紺屋」と呼ばれた染元で、その技術を受け継ぎ、図案や型彫り、染色工程に関わり、のれんや半纏、袋物を店の階上で仕立てています。 江戸っ子の粋な遊び心を随所に感じられる展示館です。

所在地:中央区日本橋浜町2-45-6

電 話:03-3666-5562

開館日:月~土(祝日・年末年始等を除く)

開館時間:9:00~18:00(土曜日のみ17:00まで)

休館日:日・祝日

アクセス:浜町駅A2番出口 徒歩1分



6足袋の博物館

管理者:有限会社 大野屋總本店



ず目を見

所在地:中央区新富2-2-1 電 話:03-3551-0896

開館日:月~金(祝日・年末年始等を除く)

休館日:土・日・祝日 開館時間:9:00~17:00

アクセス:新富町駅2番出口 徒歩1分

間屋ミュージアム

着物文化と伝統

□装小物を扱う店内の2階奥が「イチ 原・呉服問屋ミュージアム」になってい

行商から始まり、京呉服問屋として発 引源が東京に店を構えたのは明治4年

屋としての歴史を物語る様々な書類や 具、日用品などの貴重な資料が並んで



足袋の老舗

代から続く足袋の老舗「大野屋總本 「内に「足袋の博物館」と題した展 トーが設けられています。

で使用される足袋を中心に、能や狂 案などで使用される足袋が並んでい また、古代より神社祭礼などで使わ しとうず」という足袋の原型や、制作 ら見ることが出来ます。

期に建てられた木造の店舗は、思わ L張る風格です。



③ボタンの博物館 管理者:株式会社 アイリス

ボタンの世界



服飾資材メーカーのアイリスによって運営される「ボタンの博物館」には、世界中から集められたボタンやバックル約1,600点が常時一般公開されています。精巧な技術で作られたボタンには、制作当時の時代背景も反映されています。学芸員による展示の解説を聞きながら、目で楽しむだけではなく、歴史を知る楽しみも味わうことができます。

※完全予約制です※

ご訪問の際は、インターネットまたはお電話にて来館日時をご予約下さい。

予約URL: https://yoyakubako.jp/r/a055

予約電話番号:03-3864-6537(平日10:00~17:00)

所在地:中央区日本橋浜町1-11-8

ザ・パークレックス日本橋浜町2F

開館日:(完全予約制):月~金/(不定期開催)土、日、祝日

開館時間: 3部制(10:00~/13:00~/15:00~)各90分 休館日: (不定期開催以外の)土・日・祝日・年末年始・夏期休業

入館料:月~金一般800円/名(不定期開催日)一般1,000円/名

※小・中学生半額、未就学児無料

アクセス: 浜町駅A1出口 徒歩5分/東日本橋駅B1出口 徒歩10分



企画展示で紹介した 博物館・展示館

2024年6月28日~8月21日の期間、日本橋図書館7階にて、《ファッション・ライブラリー》 の企画展示を行いました。ファッションをキーワードに、服や装いに関する図書資料 の展示のほか、中央区内の服飾に関する博物館・展示館の5カ所を紹介しました。 今号でも紹介します。

謝辞

来! BuRaRiにほんばしNo.104の作成に際し、東京問屋連盟様をはじめ、 各博物館・展示館の方々には多大なご協力を賜り、 厚く御礼申し上げます。

> 株式会社 アイリス 皆口様 有限会社 大野屋總本店 福島様 三勝 株式会社 天野様 有限会社 高虎商店 髙橋様 株式会社 田源 田中様 長田様 河村様 協同組合 東京問屋連盟 関屋様

> > (会社名50音順)

オススメ!本

猫が運んできた くるみボタンの思い出



猫がくるみボタンを拾ってきたことから、不思議な物語が始まります。夫に先立たれ、子どもも独立して一人暮らしの紀奈子。そんな時、猫が拾ってきたくるみボタンはどこかで見たことがあるものでした。彼女の思い出がよみがえり、孤独を癒すきっ

かけとなります。ボタンは時空を超えて紀奈子を勇気づけます。あなたにも、そんな特別なものはありませんか。

『モノガタリは終わらない』 短編「ボタンと使者」より モノガタリプロジェクト/編 (集英社)

東京五輪のユニフォーム をデザインしたのは



この夏パリ五輪が開催されました。毎回選手団が着用するユニフォームは、私たちの目を楽しませてくれます。この時に各国の魅力を再発見する人も多いのではないでしょうか。

この本では、ユニフォーム誕生 の歴史を資料と取材で紐解き、

1964年の東京五輪のユニフォームを本当にデザインしたのは誰かの謎に迫ります。

『1964東京五輪ユニフォームの謎 消された 歴史と太陽の赤』安城寿子/著(光文社)

今回は「衣料・問屋街」関連の オススメ本を紹介します

ガイドブック片手に 問屋街探検へ



東京、大阪、名古屋の問屋 街を紹介するガイドブックです。 明治30年から続く糸専門店や 2,000種類も揃うボタンの専門店 などのほか、日本橋横山町・馬 喰町の問屋街も取り上げられて います。問屋街はプロしか入れ ないと思われがちですが、一般

の方も歓迎する店の紹介もあります。 ガイドブックを片 手に、探検に出かけましょう。

『休みをとってでも行きたい問屋街さんぽ』 古谷充子/イラストレーション(G.B.)

「鬼平犯科帳」シリーズには 日本橋の問屋が登場



日本橋の問屋街といえば、「鬼 平犯科帳」は欠かせません。

池波正太郎の「鬼平犯科帳」 シリーズには、日本橋の問屋が たびたび登場します。例えば、 日本橋の呉服問屋「近江屋」、 小網町線香問屋「恵比寿屋」な どです。どの巻にどの問屋が

登場するかはお楽しみ。秋の夜長に全24巻を読破してみては。

『新装版 鬼平犯科帳(1)』 池波正太郎/著(文藝春秋社)

<参考文献>「中央区史 中巻」東京都中央区役所/編集 東京都中央区役所

「横山町奉仕会二十五年史」横山町奉仕会/[著] 横山町問屋新聞新聞委員/編纂 横山町奉仕会 「問屋街の歴史と四十年のあゆみ」協同組合東京問屋連盟/編 協同組合東京問屋連盟

「日本橋街並み商業史」白石孝/著 慶應義塾大学出版会

「横山町奉仕会50年史」横山町奉仕会50年史編纂委員会/編 横山町奉仕会

「日本橋横山町馬喰町史」有賀禄郎/著 横山町馬喰町問屋連盟

「東京人」2021年12月号 都市出版

「繊研新聞 2024年8月5日号」朝刊4面

<参考URL>横山町奉仕会 http://www.tonya.or.jp/service/our/

大江戸問屋祭り https://tonyamatsuri.com/

※今号の「シリーズ企画 日本橋地区の寺・神社」のページはお休みです。

日本橋図書館ふくろうキャラクター「にほたん」

「にほたんだ!」「にほたんがいるよ!」と子ども達の笑顔との出会いが児童室で増えています。日本橋図書館キャラクターの名前投票から1年が経ちました。皆さん「にほたん」をご存じでしょうか?表情豊かで、季節を取り入れた姿が愛らしい青いふくろうのにほたん!館内のポスターや展示コーナーで見つけてみてください。







最近の行事より

•••特集展示•••

7階展示コーナー

『ファッション・ライブラリー』

令和6年6月28日~令和6年8月21日

日本橋に繊維問屋街があることから、「ファッション」をキーワードに、ファッション業界・民族衣装・服飾の歴史・服飾がテーマになっている小説などの本を展示しました。

壁面の掲示では、中央区内の服飾に関する展示館・博物館を紹介するほか、「ファッションAtoZ」と題したコーナーでは、ファッションに関連したAからZで始まるファッション用語を解説しました。

また、日本橋ゆかりの文豪である谷崎潤一郎が着物を愛用していたことから、谷崎の着物姿の写真を掲示し、作中の着物の描写についても紹介しました。

「ファッション」という身近なテーマのためか、大勢の方が展示を 観覧されていました。





編集後記

今回は、江戸時代から続く問屋街をとりあげました。かつての取り組みや現在の街づくりが興味深く、時代と共に新しくなる街を散策したくなりました。建物を眺めたり、街の雰囲気を味わったりしながら、ゆったりと歩いてみたいです。また、展示館・博物館では、歴史や技術をたっぷりと堪能でき、新しい知識を得ることができそうです。秋の散歩に出かけてはいかがでしょうか。